倫風宏話

# 手考足思

上廣榮治

テレビのニュースキャスターとして活躍したジャーナリストの筑紫哲也さん（一九三五～二〇〇八）は、以前は新聞記者でした。生前、講演で「新聞記者とは、文字どおり『新』しいことを『聞』いて『記』す『者』です」と話していたそうです。

「新しいこと」つまりニュースを報道するためには、何かが新しく起こった現場に行って、人の話を聞かなくてはなりません。話を聞いて、そして記事を書く。そのすべてのことを行うのが、新聞記者の仕事です。どこへ行くか、何を見るか、誰に会って話を聞くか、どう書くか。それを考えるのも、もちろん新聞記者です。

筑紫さんは、色紙に揮毫を頼まれると「手考足思」と書きました。手で考え、足で思う。手足を動かして思考する。そういう意味でしょう。行って見て会って聞いて書くことを仕事とした、いかにもジャーナリストらしい座右の銘だと思います。

人間は頭で考え、心で思っていると思い込んではいないでしょうか。しかし、私たちは「どうしようか」と考え込むとき、思わず腕組みをしたりします。これは、腕が考えているようにも見えます。また、よい方法が閃いたときには、「そうだ！」と叫んで、左手の手の平を右手の拳で打ったりします。手も思考に参加しているのかもしれません。

私たちはあれこれと思い悩み考えるとき、部屋の中をぐるぐると歩き回ることがあります。足でも思い悩んでいるのです。それでも埒があかないときには、気分転換に散歩に出たり、プールに泳ぎにいったりします。これも人間が手や足で、また体全体で、考えたり思ったりしている証拠でしょう。

先日、夏休みにお孫さんが遊びに来たときのことを知人が話してくれました。「孫が私の話をメモを取りながら聞くんですよ」とうれしそうに言うのです。孫一家は先祖の墓参りも兼ねて里帰りをしていたのでしょう。お孫さんの質問は、先祖の人たちの話や仏教のことだったようです。話好きの知人のことですから、大いに蘊蓄を傾けたのでしょう。話が佳境に入ると、お孫さんがメモを取り始めたので、知人が驚いた顔をすると、こう言ったといいます。

「メモを取ると覚えやすいんだよ。手を動かして文字を書くから手が覚えるし、自分で書いた文字を見るから目が覚える。だから忘れない。そんな気がするんだ」

知人は大いに感心して、若き日のある出来事を思い出したといいます。彼は、現役時代は出版社に勤める編集者でした。あるとき、偉いお坊さんのインタビューに行き、生い立ちを聞いたそうです。お坊さんは、学校を卒業して寺で修行するために親元を離れるとき、親から「手が二本、足が二本。合わせて四本。それがおまえの資本だ。頑張りなさい」と言われたという話を聞かせてくれ、知人はそのことをインタビュー記事に書きました。記事の見出しは、印象深かった「合わせて四本、それが資本」という言葉を

使ったそうです。

人間は大切なことは体で覚えます。手が覚え、目が覚えるというほかにも、体のあちこちを使って記憶に留めます。書いた文字を朗読すれば口が覚え、朗読を聞いた耳が覚えます。体で覚えたことはなかなか忘れません。自転車の乗り方、水泳などは、一度体が覚えたら一生忘れないといわれます。

体を動かして覚える、体を動かし体験して会得する、それが「体得」です。人は一生懸命に何事かに取り組むとき、全身全霊を総動員しているのです。

倫理も実際に体を動かす実践によって身につきます。それは「倫理の体得」です。「今日一日……」で始まる「朝の誓」は倫理体得の手引きであり、朝起会は実践倫理を全身全霊で体得する道場です。

ところで、筑紫さんが好んだ「手考足思」という言葉は、有名な陶芸家、河井寛次郎さん（一八九〇～一九六六）の「手考足思」と題する詩に由来するものです。ご存じのように、陶芸とは、粘土をこね、ろくろを手や足で回しながら形を作り、干し、釉薬をかけて、高温の窯で焼いて、陶磁器などの作品を作る技術です。文字通り「手で考え足で思う」という表現にぴったりの心身一如の技芸です。

河井寛次郎さんは人間国宝も文化勲章も辞退するほど名利にとらわれない芸術家で、陶芸作品だけでなく、書や詩もたくさん残しています。

河井さんの詩「手考足思」の最後は「過去が咲いている今　未来の蕾で一杯な今」と結ばれています。大自然の賜物である太古の土を素材に、いま花咲かせようとしている作品の仕上がりに思いを馳せ、心をときめかせている作者のようすが目に浮かびます。今この時を心身一如となって仕事に没頭する。その気迫が伝わってくるような言葉です。



実践倫理に引き寄せますと、過去からの親の恩、師の恩、社会の恩という三つの恩があってこそ、今、私たちは咲いています。実践者として日々を生きる今このときは、未来に倫理の花を咲かせるための蕾を増やしているときなのかもしれません。

いつも「暮らしが仕事、仕事が暮らし」と言っていたという河井さんは、「仕事のうた」という詩も残しています。それはこんなふうに始まります。現代的な表記に変えて紹介します。

仕事が仕事をしています／仕事は毎日元気です／出来ない事のない仕事／どんな事でも仕事はします／いやな事でも進んでします／進む事しか知らない仕事／びっくりする程力出す

この「仕事」を「倫理」に置き換えると、私たちの生き方に通じてきます。まず、私たちには大自然の摂理によって生まれつき倫理力が備わっています。もともと備わっている倫理力を発揮するのが倫理の実践です。つまり、「倫理が倫理をしています」といえるでしょう。

次の「倫理は毎日元気です」はそのとおりです。私たちは毎朝、元気に倫理の実践を誓います。

そして、倫理は全能です。何でも可能にします。つまり、「出来ない事のない倫理」なのです。

私たちの目標は倫理に満ちた社会を創ることです。そのために「どんな事でも倫理はします」。「いやな事でも進んでします」。いやなことでも上機嫌に実践し、行うべきことを身軽にすぐ行います。倫理を行う者は喜んで進んで働きます。ですから「進む事しか知らない倫理」なのです。

大自然の摂理のままに倫理の実践を継続すれば、驚くほどの成果がもたらされることは皆さんご存じのとおりです。倫理は「びっくりする程力出す」ものなのです。

七十周年に向かって、私たちもいよいよ自他一如の実践の境地になりきろうではありませんか。